令和３年度

全国学力・学習状況調査の結果について（概要）

千葉市教育委員会

本市児童生徒の調査結果について公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは学力の一部であり、各学校の教育活動を多角的に評価・分析した結果と合わせて、学校教育活動の改善に努めてまいります。

１　調査の概要

（１）調査実施日　　令和３年５月２７日（木）

（２）調査対象　　小学校第６学年　中学校第３学年

（３）調査内容　　国語　　「知識」「活用」を一体的に問う問題

算数・数学　　「知識」「活用」を一体的に問う問題

質問紙調査（学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等）

２　教科別結果概要

（令和３年度と悉皆調査実施年度との比較）

（１）全国・千葉県・指定都市の平均正答率（%）と千葉市全体の平均正答率（ここでの全国は、公立のみを示す）

【資料１】問題別平均正答率一覧（%）[全国・千葉県・指定都市・千葉市]＜平成 25～令和３年度＞

小学校		全国 平均正答率		千葉県 平均正答率		※指定都市 平均正答率		千葉市 平均正答率		全国との比較	
国語	**令和3年度**	**65**		**65**		**65**		**65**		**±0**	
	令和元年度	**64**		**63**		**64**		**64**		**±0**	
		A問題	B問題	A問題	B問題	A問題	B問題	A問題	B問題	A問題	B問題
	平成30年度	71	55	70	53	71	55	71	54	0	−1
	平成29年度	75	58	75	57	75	58	76	59	1	1
	平成28年度	73	58	73	58	73	59	73	59	0	1
	平成27年度	70.0	65.4	71.5	64.5	70.3	65.9	72.8	65.6	2.8	0.2
	平成26年度	72.9	55.5	75.8	55.5	73.3	56.3	77.1	57.3	4.2	1.8
	平成25年度	62.7	49.4	61.9	50.1	63.4	50.9	64.2	52.6	1.5	3.2
算数	**令和3年度**	**70**		**70**		**71**		**71**		**1**	
	令和元年度	**67**		**65**		**67**		**67**		**±0**	
		A問題	B問題	A問題	B問題	A問題	B問題	A問題	B問題	A問題	B問題
	平成30年度	64	52	62	51	64	52	64	52	0	0
	平成29年度	79	46	77	46	79	47	78	48	−1	2
	平成28年度	78	47	77	47	78	48	77	48	−1	1
	平成27年度	75.2	45.0	74.7	45.1	75.7	46.4	76.4	47.5	1.2	2.5
	平成26年度	78.1	58.2	78.2	58.8	78.3	59.6	79.8	60.6	1.7	2.4
	平成25年度	77.2	58.4	77.1	59.4	77.5	59.8	78.5	62.3	1.3	3.9

中学校		全国 平均正答率		千葉県 平均正答率		※指定都市 平均正答率		千葉市 平均正答率		全国との比較	
国語	**令和3年度**	**65**		**65**		**65**		**66**		**1**	
	令和元年度	**73**		**72**		**73**		**73**		**±0**	
		A問題	B問題	A問題	B問題	A問題	B問題	A問題	B問題	A問題	B問題
	平成30年度	76	61	76	61	76	62	76	62	0	1
	平成29年度	77	72	76	72	78	73	77	72	0	0
	平成28年度	76	67	76	67	76	67	77	68	1	1
	平成27年度	75.8	65.8	76.0	65.7	76.4	66.3	77.6	67.2	1.8	1.4
	平成26年度	79.4	51.0	79.8	51.7	79.5	51.5	80.7	53.0	1.3	2
	平成25年度	76.4	67.4	76.2	68.1	76.5	68.0	77.7	70.7	1.3	3.3
数学	**令和3年度**	**57**		**56**		**58**		**58**		**1**	
	令和元年度	**60**		**57**		**60**		**59**		**−1**	
		A問題	B問題	A問題	B問題	A問題	B問題	A問題	B問題	A問題	B問題
	平成30年度	66	47	64	46	67	48	65	47	−1	0
	平成29年度	65	48	63	47	65	49	64	49	−1	1
	平成28年度	62	44	60	43	63	45	62	45	0	1
	平成27年度	64.4	41.6	63.4	41.6	65.3	43.0	65.5	44.9	1.1	3.3
	平成26年度	67.4	59.8	66.7	60.1	67.7	60.9	68.3	61.6	0.9	1.8
	平成25年度	63.7	41.5	63.2	41.5	64.2	42.5	65.7	45.0	2.0	3.5

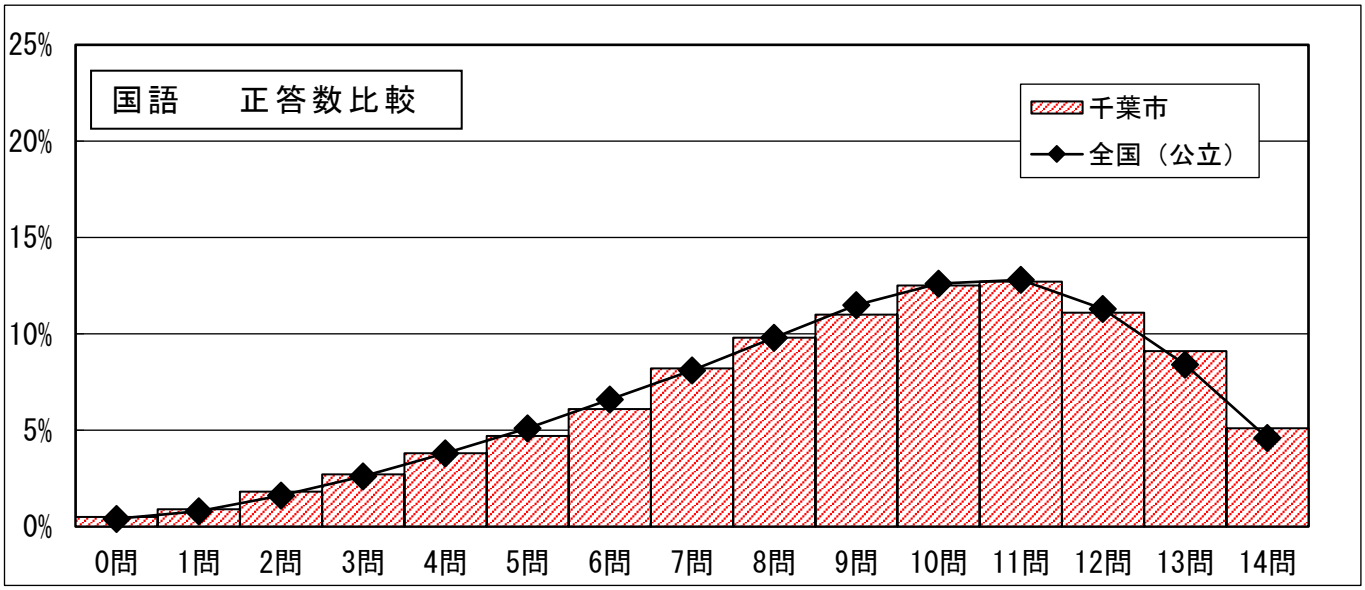
※令和2年度は，新型コロナウイルス感染症に係る学校教育への影響等を考慮し，全国で実施していない。

※国語と算数・数学の問題は、基礎的な知識を尋ねる「A問題」と、その知識の活用力をみる「B問題」に分かれていたが、平成31年度（令和元年度）より新学習指導要領の方向性に沿う形でA、Bを一体的に問う問題へ改善

※平成28年度より平均正答率は整数値で公表

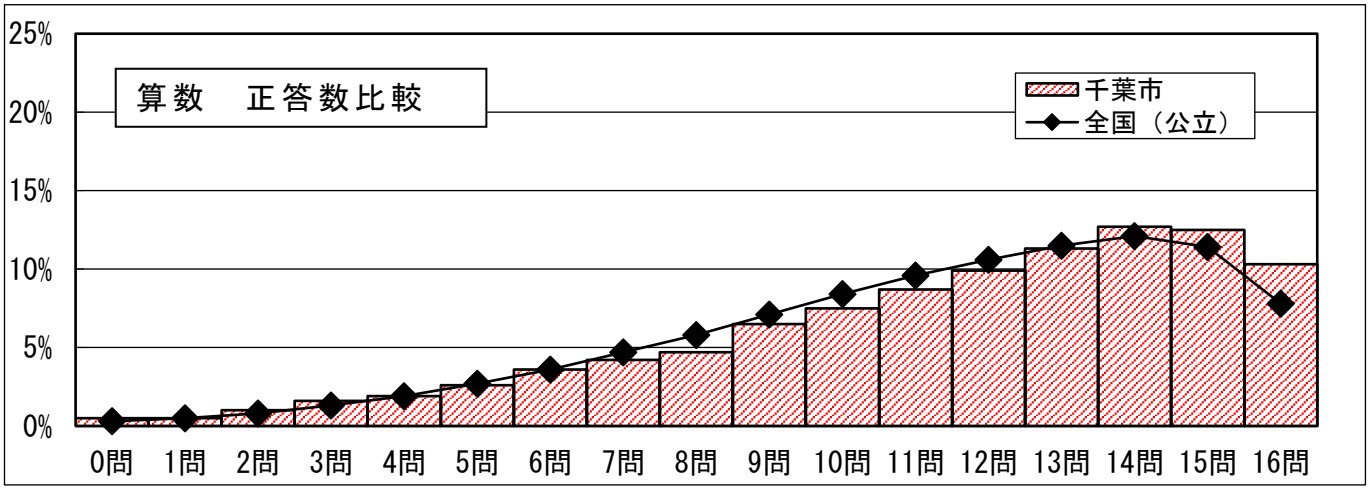
※「指定都市」の正答率は平成29年度より。平成28年度より以前は「大都市」として政令指定都市と東京23区を集計。

【資料２】正答数分布（横軸：正答数、縦軸：人数の割合）［全国・千葉市］＜令和３年度＞
小学校６年生国語



	平均正答数	平均正答率	中央値	標準偏差
千葉市	9.1 問／14 問	65%	10.0	3.1
全国（公立）	9.1 問／14 問	65%	9.0	3.1

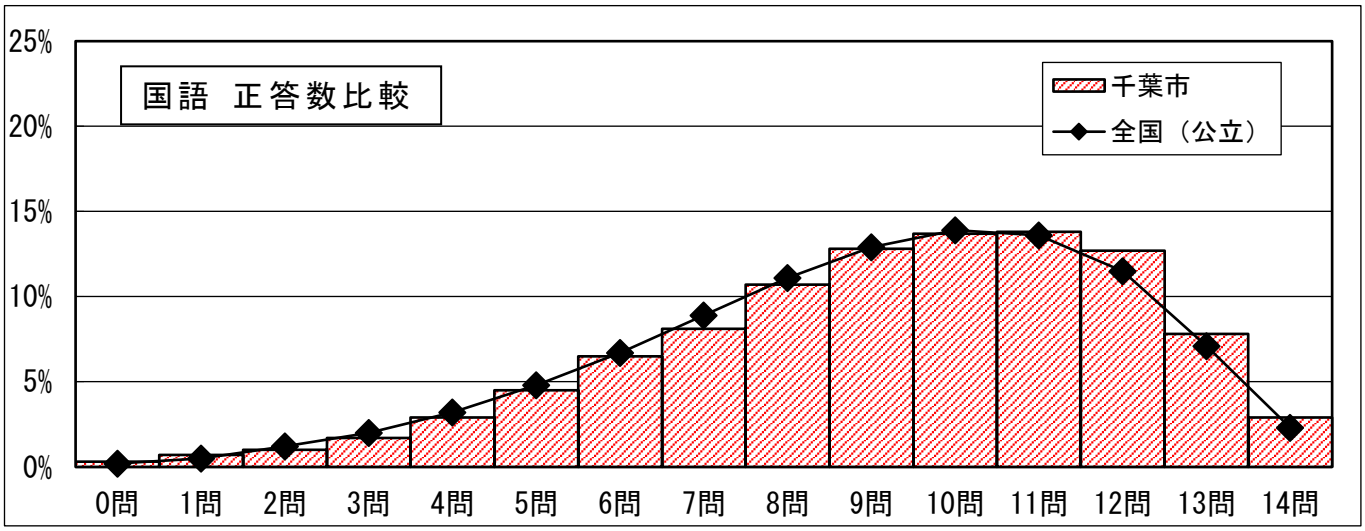
小学校６年生算数



	平均正答数	平均正答率	中央値	標準偏差
千葉市	11.4 問／16 問	71%	12.0	3.6
全国（公立）	11.2 問／16 問	70%	12.0	3.5

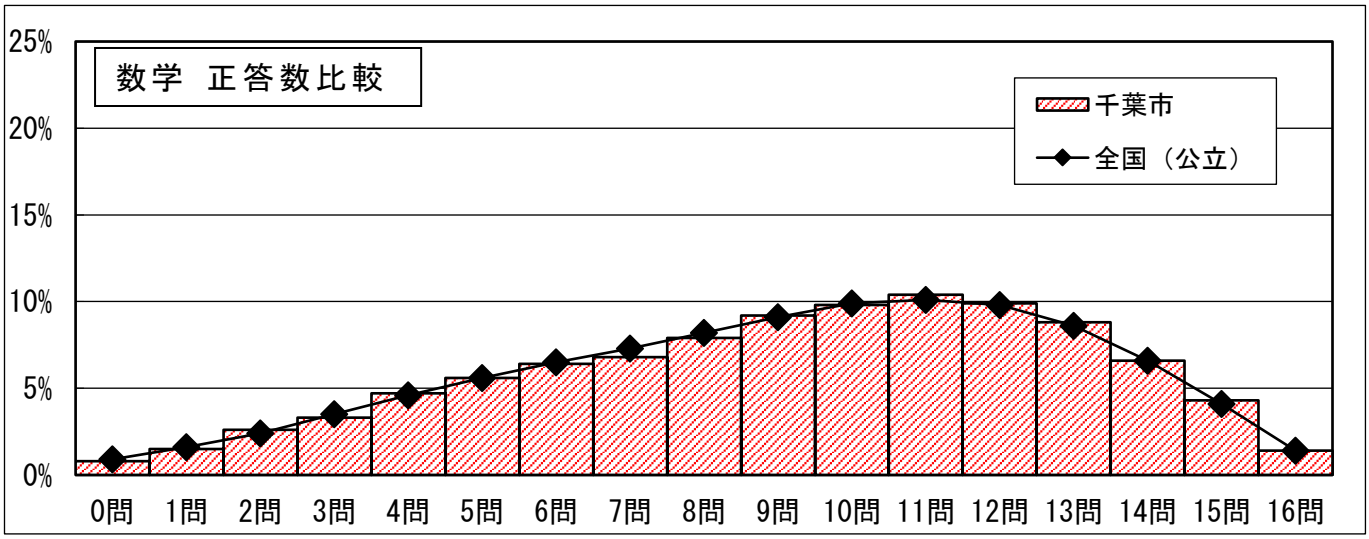
・国語では、平均正答数、平均正答率は共に全国と同じ数値である。正答数の分布は、全国と同様に右寄りの山型のグラフになっている。正答数が１～２問の層と 13 問以上の層の割合が、全国と比較してやや高くなっている。正答率が低い層への学習指導を見直し、中位層に引き上げることが課題である。
・算数では、平均正答数は全国より 0.2 問高く、平均正答率は１ポイント高い。正答数の分布は、全国と同様の山型のグラフになっており、全国よりも上位層の児童の割合が高い右寄りの形となっている。正答率が低い層への学習指導を見直し、中位層に引き上げることが課題である。

中学校３年生国語



	平均正答数	平均正答率	中央値	標準偏差
千葉市	9.2 問／14 問	66%	10.0	2.8
全国（公立）	9.0 問／14 問	65%	9.0	2.8

中学校３年生数学



	平均正答数	平均正答率	中央値	標準偏差
千葉市	9.2 問／16 問	58%	10.0	3.7
全国（公立）	9.1 問／16 問	57%	10.0	3.7

・国語では、平均正答数は全国より 0.2 問、平均正答率は１ポイント高い。正答数の分布は、全国と同様に正答数の多い生徒の割合が高い、右寄りの山型のグラフになっている。正答数が 12～14 問の上位層の割合が全国よりも高くなっている。下位層の引き上げを図ることが今後の課題である。
・数学では、全国より平均正答数は 0.1 問、平均正答率は１ポイント高い。正答数の分布は、全国と同様のやや右に寄ったなだらかな山型となっている。下位層と中位層の引き上げを図ることが今後の課題である。

（２）全国平均正答率との差異から見る各学校の経年推移＜令和元年度と３年度の比較＞

【資料３】全国平均正答率との差異から見る各学校の経年推移表

令和元年度の全国と各学校の正答率の差と令和３年度の全国と各学校の平均正答率の差を比較

出題される問題が毎年異なり、調査母体の児童生徒も異なってはいるが、変化のある学校の傾向を把握するため、経年比較を行う。

ア　小学校（条件：令和元年度または令和３年度の該当学年の調査実施児童数が 40 人以下の学校については、調査母体による影響が顕著となり、経年比較できないため公表しない。）

推移表記　⇗:全国平均との差が大きく向上　↗: 全国平均との差が向上　空欄: 全国平均との差に大きな変化がない　↘: 全国平均との差が低下

学校名	国語	算数
新宿	↗	⇗
本町	↗	
寒川	↘	↘
登戸		
院内	⇗	⇗
蘇我	↘	↘
都		
都賀	↘	
検見川	⇗	↗
稲毛		⇗
園生	↗	
若松	↗	↗
大森		
稲丘	↘	↗
花園		
犢橋	↘	
幕張	↗	⇗
長作		
生浜	↘	↘
誉田	↗	↗
轟町	↘	↗
鶴沢	↗	
平山		
松ケ丘		↗
宮崎		↗
緑町		↗
川戸	↘	↗
山王	⇗	↗
小中台		
小倉	↘	
千草台		
稲毛二	↘	
あやめ台	↘	↘
星久喜		↗
幕張東		
桜木	⇗	↗
宮野木		
生浜西	↗	↗
こてはし台	⇗	⇗
西小中台	↘	⇗

学校名	国語	算数
北貝塚	⇗	⇗
幕張西	↘	
草野		⇗
柏台		
千城台東	↘	↘
小中台南	↘	↘
幸町三	↗	↗
高洲三	↘	↘
千草台東	↗	⇗
作新		↘
みつわ台北		
誉田東	↘	
みつわ台南	↘	
幕張南	↘	↗
都賀の台		
上の台	↘	
磯辺三	↘	↗
朝日ケ丘		
生浜東		↗
泉谷	↘	
土気南	↗	⇗
西の谷		↗
小谷		
有吉	↘	↘
打瀬	⇗	⇗
金沢		
あすみが丘	↗	↗
扇田	↘	↘
瑞穂		
海浜打瀬		↗
おゆみ野南	↘	↗
美浜打瀬		
高洲		↗
真砂東		
真砂西		↘
高浜海浜	↘	
磯辺		↘
幸町	↗	
千城台わかば		
千城台みらい		

イ　中学校（条件：令和元年度または令和３年度の該当学年の調査実施生徒数が 80 人以下の学校については、調査母体による影響が顕著となり、経年比較できないため公表しない。）

推移表記　⇗:全国平均との差が大きく向上　↗: 全国平均との差が向上　空欄: 全国平均との差に大きな変化がない　↘: 全国平均との差が低下

学校名	国語	数学
加曽利	⇗	⇗
葛城		
椿森		↗
緑町		↘
小中台		
花園		
新宿	↗	⇗
蘇我		
幕張		
生浜	⇗	⇗
誉田	↘	↗
轟町		↗
松ケ丘		
稲毛		
千城台西	↗	⇗
こてはし台	↘	
高洲一	↗	
草野	↗	⇗
幕張西	↘	↗

学校名	国語	数学
都賀	↘	
みつわ台		
緑が丘	↗	↗
天戸		
若松	↘	↗
幸町二	↘	↘
山王		
朝日ケ丘	↘	↘
貝塚		↘
泉谷		⇗
幕張本郷	↘	
土気南	↗	↗
打瀬		↘
有吉	↗	↗
大椎	⇗	⇗
真砂		
おゆみ野南		
磯辺		
花見川		
高洲		

【資料４】平均正答率の顕著な向上が見られた学校の取組事例＜経年推移の比較から＞
顕著な向上が見られた学校からは、以下のような取組が報告されている。

ア　小学校

学校名	取組内容
新宿小	各学年ごとに学力向上アクションプランの重点的取組を決めた。令和２年度５年生の取組として、国語、算数ともに小テスト、プリント等の日常化を図り、基礎・基本の定着を図った。例えば自作の漢字プリントを家庭学習の課題として、翌日の小テストで取り組むなどした。算数の授業では理数サポーターとのT.Tによるきめ細やかな指導を行った。練習問題を解く時間を増やし、一人一人に丁寧に指導することで、知識・技能の充実を図った。また、全校の取組として、保護者に向け「家庭学習の手引き」を作成し、家庭学習の継続的取組について啓発を行うほか、各学年で児童向け「家庭学習のすすめ」を作成し、基礎的な取組と発展的な取組を紹介することで、具体的に何を行えばよいかを「見える化」した。
院内小	教科担任制による専門性の高い指導を行っている。また、学力が低い児童については、個別で取り出し指導を行うことで学力の向上を図っている。
検見川小	子供同士による学び合いを意識して授業を進めている。友達の考えを聞くだけでなく、理解しようとしたり、自分の考えと比べたりすることで、自分の考えを広げたり、深めたりすることができるようになったのではないかと考える。 また、「ノートの達人」という名前で、全学級がノート指導に力を入れ、学年代表で校長室前に手本として掲示している。自分の考えを書くだけでなく、思考の流れを整理したり、意欲を高めたりすることにもつながっている。全校で取り組むことにより、着実に基礎学力が付いてきていると考える。

若松小	研究教科である国語では、児童が苦手としている「書くこと」の学習に力を入れている。書くために必要な語彙指導を充実させたり、目的意識や相手意識を持って書く機会を増やしたりして取り組んでいる。また、学力向上アクションプランでは「基礎基本の徹底」をテーマにしており、授業では、導入の工夫をし、児童の学習意欲を高めるとともに、見てわかるように提示することで理解できるようにしている。また、学力が定着していない児童については個別に指導することで学力の向上を図っている。
幕張小	「生活科」「総合的な学習の時間」を中心とした教科横断的なカリキュラム（単元配列表）「幕小プラン」を作成して全ての教科の授業実践をしている。子どもたちが目的意識やゴールを見据えて、必要な情報を読み取ったり要点を捉えて説明したりする学習活動の中で、「書く力」「話す力」「論理的に考える力」「まとめる力」「活用する力」等を培ってきている。これらの力が、全国学調の国語科や算数科の「知識・技能」「思考・判断・表現」さらには「主体的に学びに向かう力」に反映しているものと考えられる。
誉田小	朝学習の際に、学年の実態に合わせた新聞記事を活用し、要点や筆者の考えを時間内に読み取る活動を行った。 題意を的確に捉え、解き方を考え、正しい計算方法を用いて答えを導く課題解決学習の過程を教師が意識して低学年から指導し、児童が学習の仕方を身に付けられるように授業改善できるように努力した。問題把握の段階で場面を想像し、問題の内容を理解しやすくすると同時に、それらを整理し、どのような方法で解いていくのかという見通しの力を身に付けることができるように授業を工夫した。 基礎基本の内容については、朝学習や授業の前後などに個別に対応したり、小テストを行ったりなど、十分に理解できるように繰り返し指導し、「できた」「わかった」と達成感や満足感を味わえるように支援した。
山王小	朝学習で取り組む内容を全学年で曜日ごとに統一した。特に３年前から認知機能を高める「コグトレ」を取り入れている。１回５分程度の短い時間でできる問題なので、児童が集中して問題に取り組んでいる。また、校内研究の取組の一環として、学年の実態に合わせて定期的に漢字テストや短作文を行い基礎基本の学力向上を図っている。更に、学習でつまずきが見られる児童に対しては、７学年の職員や学習指導員を中心に休み時間に取り出し指導を行っている。また、４年前から取り入れている脳と神経、体幹を刺激するコーディネーション運動も効果があると考える。
生浜西小	各学級では、児童の学習意欲を高めるために、まずは生活面を整えることを職員間で共通理解を図った。「挨拶チャンピオン運動」「靴箱の整理」「毎月の生活・いじめアンケート」などを活用し、安心・安全でどの児童でも頑張れば評価される環境を整えた。学習面では、担任間での連携を密にしながら、効果的な指導等について共有し、指導改善を図っている。
こてはし台小	国語科では、全校で「１人１００冊運動」に取り組み、年間目標冊数（低学年 100 冊、中学年 80 冊、高学年 60 冊）を目指して読書を行っている。この運動により、児童の読書量が増え、読解力・表現力の向上につながっている。算数科は、校内研究において「『わかる』『できる』楽しさを味わうことのできる子どもの育成～主体的・対話的な数学的活動を通して～」という主題を解明するための授業改善を図った。児童が全校共通の「学習の進め方」を基に学習を進めたり、本読み計算等の算数が楽しいと感じる活動を日々の学習の中に取り入れたりすることで、意欲的に学習を進められるようになった。上下学年２回の検証授業以外に、年間２回（９・１１月）の「授業参観ウィーク」を実施し、全教員が互いに授業を参観し合い、実践について話し合うことで授業改善につながった。

北貝塚小	全学年において、算数科の時間には少人数指導や理数サポーターによるきめ細かな指導・支援が行われるように教育課程の編制を行った。また、学年ごとの学力向上アクションプランを基に各学年における重点的な指導・支援の内容の共有を図った。前期と後期の終了時には学年ごとの学力向上アクションプランの振り返りを実施し、成果と課題を反映させて学年別「具体的な取組目標」の内容を更新するようにした。学習の実際については、算数科の学習において学びの定着を図るために、１単位時間に必ず適用問題を取り組むことを心がけた。また、書画カメラの全クラスへの配備を進め、ギガタブとの併用を行いながら素材をより視覚的に捉えられるよう、ＩＣＴ機器の積極的活用を図り、理解の定着につなげている。
幸町第三小	国語、算数とも記述式の正答率が向上した。普段の学習から、考えを書くことを、どの教科でも共通して行うようにしている。学習課題に対し、自分の考えをもつ時間を確保し、その後グループやペア、学級全体で互いの考えを伝え合うようにしている。また今年度より、ギガタブの「発表ノート」を使用することで、互いの考えの交流を行いやすくなった。友達同士で考えを伝え合う活動の充実が、「言葉で説明する力」を高め、記述式の正答率を高めたと考えられる。
千草台東小	朝学習「ぐんぐんタイム」の時間を使って漢字小テストや計算の習熟、また、宿題では漢字練習やマス計算などの取組により、基礎・基本の定着を図った。授業の中では、国語では文章や資料の読み取りを丁寧に扱ったり、算数では図や式を関連付けて考える場面を設けたりした。 本校では昨年度よりユニバーサルデザインを取り入れ、どの児童も集中できる教室環境、わかりやすい授業改善を目指してきた。具体的には、教室前面の棚をカーテンで隠したり、使うチョークの色や机上に置くものを制限し授業に集中できるようにしたりした。 また、本校の児童は無回答が少なく、質問紙の回答でも県や全国を上回る項目があるなど、意欲面が高い特徴がある。道徳を行内研究で取り組んでおり、「個性の伸長」や「相互理解」などに力を入れてきた。自他ともに認め合い褒める学級経営をしてきた。
土気南小	算数科において、「主体的に問題解決に取り組む子を育てる算数指導　数学的な見方・考え方をはたらかせる発問の工夫を通して」を研究主題として、主に教師の発問を見直すことを通して学習改善を図ってきた。それにより、日々の算数指導の際、身につけさせたい力を明確にした授業づくりが行われるようになった。
打瀬小	学力テストや学力・学習状況調査の結果を分析し、各学年の課題を洗い出した。その考察をもとに、①朝タイム（1時間目が始まるまでに取り組む帯の自習時間）において、週に１度、その課題の対策に向けて取り組む時間を確保した。②洗い出された課題を念頭に置きながら教材研究し、日頃の学習の中に組み込むようにした。③必要に応じてプリント学習をしたり、ギガタブを使ってドリル学習に取り組んだ。④「うたせスタンダード」という学習規律に関するルールを全校で統一し、教員によって指導に差が出ないようにした。
あすみが丘小	国語科において、「主体的に学び、考えを深める子どもの育成～国語科における読みを深める指導の工夫～」を目指した授業改善を行った。あすみステップタイム（１５分間の朝学習）の内容を見直し、総合的に子どもの学力の底上げすることをねらって「読むこと」「書くこと」「話すこと・聞くこと」の活動をバランス良く行った。活動内容を全職員に周知するため、実践事例集の作成も行った。全国学力学習状況調査の結果と考察を全職員で共有し、日々の実践に生かしてもらうように働きかけた。 また、主要教科を中心に、体育や外国語等の教科においても「ふりかえり」に重点を置き、本時における自身の学びや課題、次時に向けての思いなどを記載するようにした。その内容を教師が確認して児童の学びの定着を図り、必要な手立てを講じていくというサイクルを共通理解することで、一つの授業に対する実践力を高めることができた。

イ　中学校

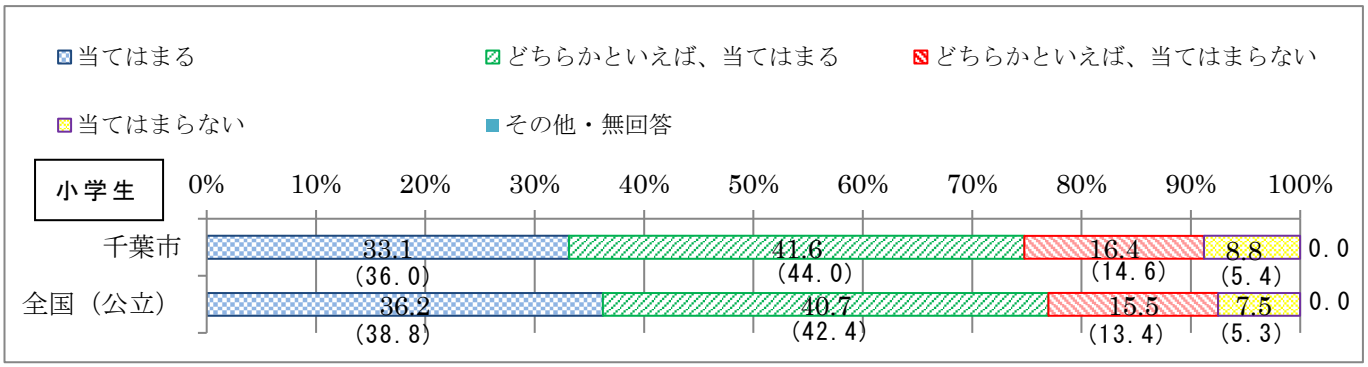
加曽利中	基礎的・基本的な学力の定着を図る取組として、本時の「学習の目標と振り返り」をすべての教科で行っている。また、週ごとに教員が作成した国語・数学・英語の３教科の学習プリントを使って生徒の学力向上に努めている。
新宿中	「指導と評価の一体化」を図るため、各教科部会をこまめに行いながら、生徒に身につけさせたい力を意識した授業展開を日々実践した。また基礎基本の定着度を向上させるため、定期テスト前や長期休業中などに学習相談を実施した。若手教員の指導力向上や悩み相談を兼ねて、フレッシュ研修を年に数回実施した。
生浜中	学校研究主題のもと、全教科「共に考え高め合う学習活動」を意識し、小グループでの交流や話合いの場を積極的に取り入れ、生徒同士が教え合ったり認め合ったりしながら学習活動を行っている。また、帯単元の活用、定期的な小テストの実施など各教科工夫を凝らし、基礎・基本の定着に向けた学習支援を行っている。１，２学年の数学では、４コマ中、１コマで TT の授業を行い、生徒の実態に合わせたきめ細やかな個別指導を行っている。
千城台西中	生徒の基礎学力の向上、職員の授業力の向上を目指した。基礎基本を確認するドリルの習慣化、授業で学習のねらいを明確に生徒に伝える、まとめテストの実施、学習相談の充実等に重点的に取り組んだ。
草野中	調査結果を全職員で共有することで、自校の課題を明確にし、それを学力向上アクションプランの重点項目として位置付けた。長期休業中に行っている学習相談の形式を、質問を受ける形式から講義形式・問題演習形式に変更した。学習方法がわからない生徒に対して個別対応を行い、家庭学習習慣の確立に努めた。
緑が丘中	小中連携の研究指定を受けた５年前から、数学科では、小学校と「学び方をそろえる」ことを重点目標とし、「学習問題の把握・自力解決・考え方の共有・まとめ」の４つの流れで一時間の学習を進めることを大切にしている。 ここ数年では全教科でこの４つの流れを柱に授業を進めることで、生徒が見通しをもって授業を受けることができている。
土気南中	生徒にとって、わかりやすい授業をづくりをした。各教科で定期的に学習相談を行い、知識の定着を図った。個別課題の提供、休み時間に気軽に学習相談や補習を行い、基礎基本の定着を図れるようにした。家庭学習推進のために、各教科で生徒の負担にならない課題を出し、学習に対する意識を継続できるような取り組みを行った。
有吉中	令和元・２年度の２年間、表現力の育成を目指して学校研究主題の解明に努めた。身につけさせたい表現力とは何かを明確にし、統一した板書表示のプレートを用いて毎時間必ず学習課題を示すことや、「書く活動」「話す活動」「作品や動作で表す活動」などの場面を意図的に設定することなどに取り組んだ。定期テスト前や夏季休業期間中に学習相談や講座を設け、下位生徒に対する基礎・基本の定着にも努めた。
大椎中	数学は、授業において問題を解く際の自分の考え方を文章で書かせることで、思考を整理させたことが、「数学的な見方や考え方」の正答率を高くしたと考えられる。 国語は、毎日の朝読書や図書館指導員や図書委員による読み聞かせが読解力の向上につながっている。また、国語の授業において、本や文章の形態に応じて語句の意味やキーセンテンスなどに着目させ、内容をとらえさせたことが、「読む能力」の正答率を高くしたと考えられる。 更に、隔週で 10 分程度の朝ドリルを行う時間を設け、基礎的な計算や漢字をドリル学習したことが、全体的な学力の底上げにつながったと考えられる。

３　質問紙調査結果概要

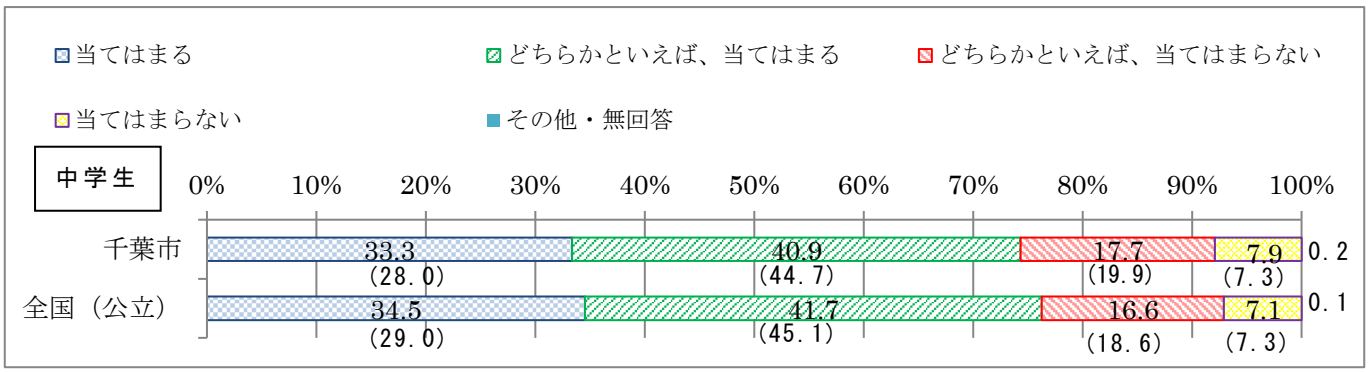
【資料５】児童生徒質問紙調査より［千葉市・全国］＜令和３年度＞
※質問文末の（　）内の数字は、「児童生徒質問紙調査」の質問番号を示している。
※帯グラフの（　）の数字は、令和元年度同質問の回答の割合を示している。
※小数第２位以下を四捨五入しているため、合計が 100%にならない場合がある。

〔自己肯定感、将来の夢や目標等に関する意識〕

１　自分には、よいところがあると思いますか。（小６）（中６）

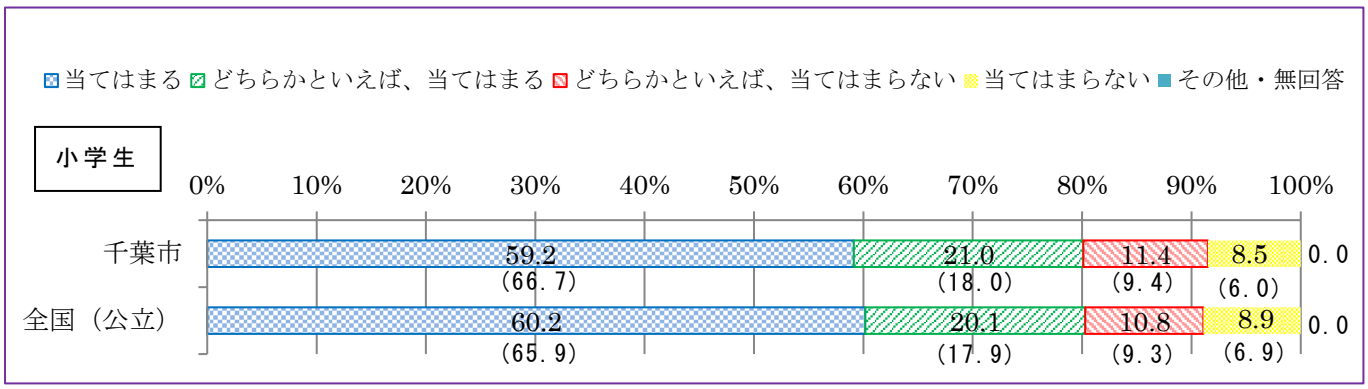


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→74.7%（全国より 2.2 ポイント低い）

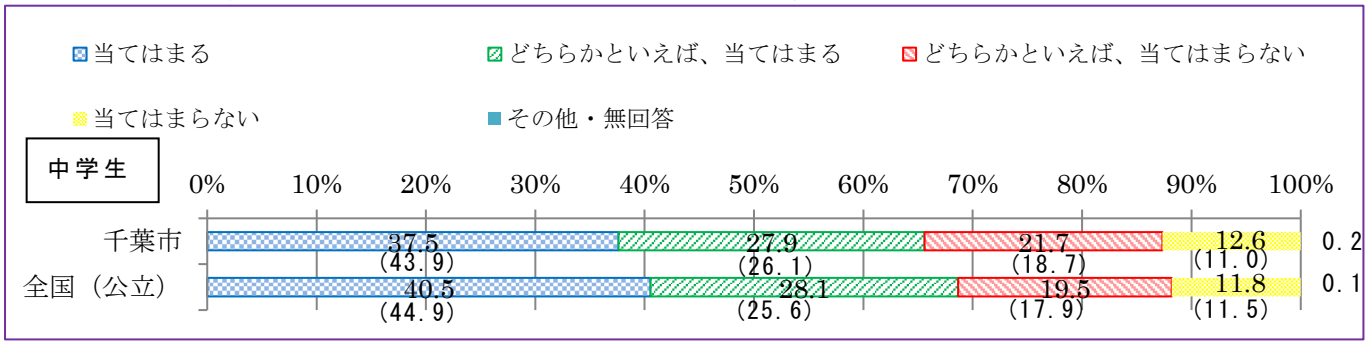


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→74.2%（全国より 2.0 ポイント低い）

２　将来の夢や目標を持っていますか。（小７）（中７）

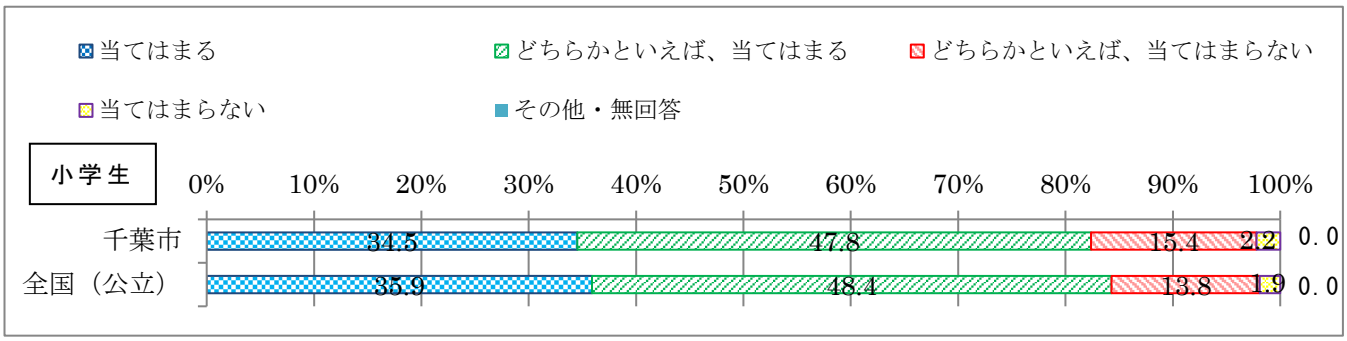


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→80.2%（全国より 0.1 ポイント低い）

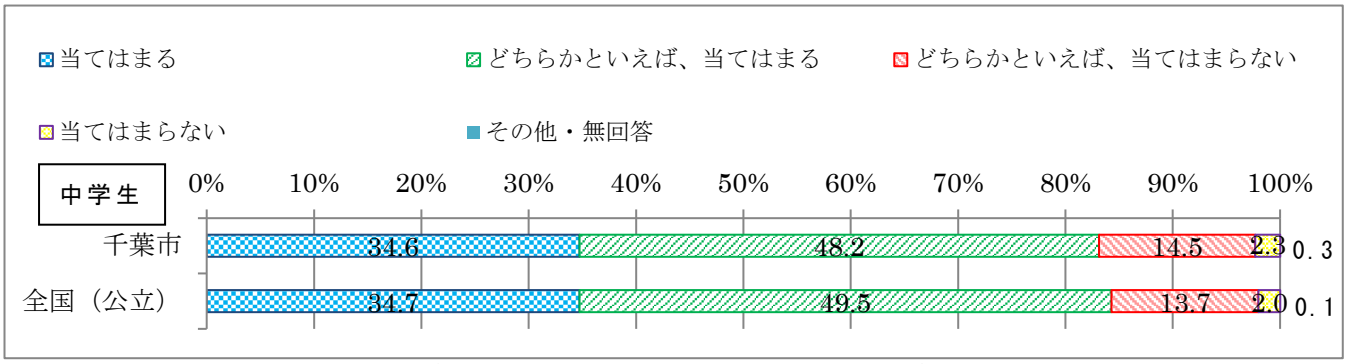


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→65.4%（全国より 3.2 ポイント低い）

３　自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしていますか。（小８）（中８）
※令和元年度に同質問は無いため、（　）の記載なし



・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→82.3%（全国より 2.0 ポイント低い）

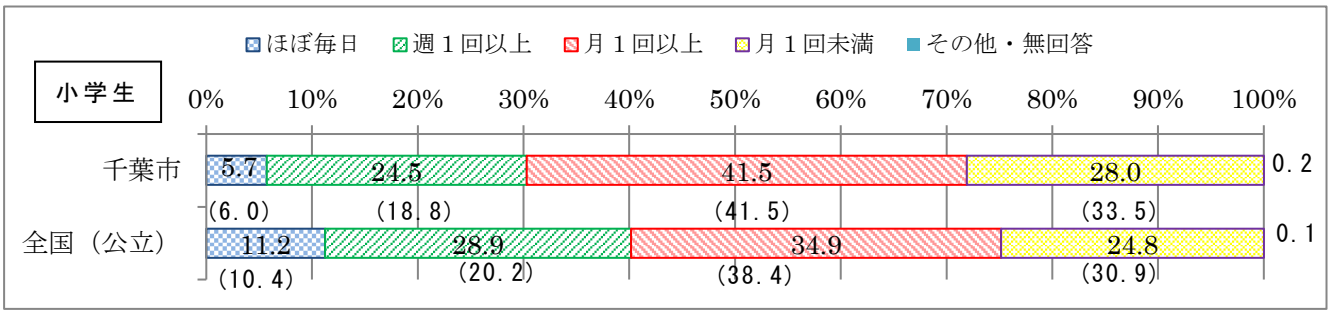


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→82.8%（全国より 1.4 ポイント低い）

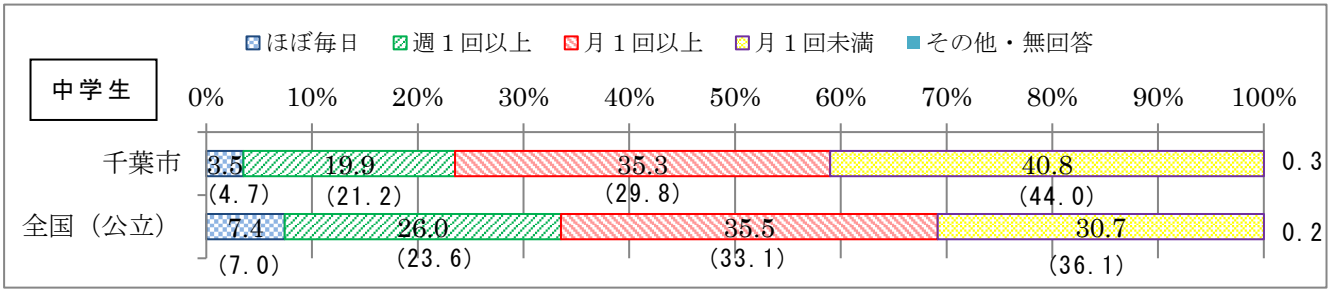
設問１「自分には、よいところがあると思いますか」の肯定的な回答の割合は、平成 25 年度以降増加傾向が見られていた中で、小学生の方が中学生より 10%ほど高い傾向にあったが、今年度は小学生も中学生も同程度となり、差が縮まってきている。設問２「将来の夢や目標を持つこと」については、小学生では肯定的な回答が 80%を超えている。これは、キャリアパスポートの取組など、キャリア教育を進めている成果と考えられる。設問３「自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしていますか」については肯定的な回答が小中学生ともに 80%程度である一方で、20%近くは否定的回答をしていることを踏まえ、目標を明確にして取り組む機会や計画を立てて実行するような機会を増やし、主体的に取り組むことで、達成感や成就感を持たせられるようにしていくことが必要である。

〔ICT 機器の活用に関する意識〕

４　５年生まで(1,2 年生の時)に受けた授業で、コンピュータなどの ICT 機器をどの程度使用しましたか。（小 26）（中 26）

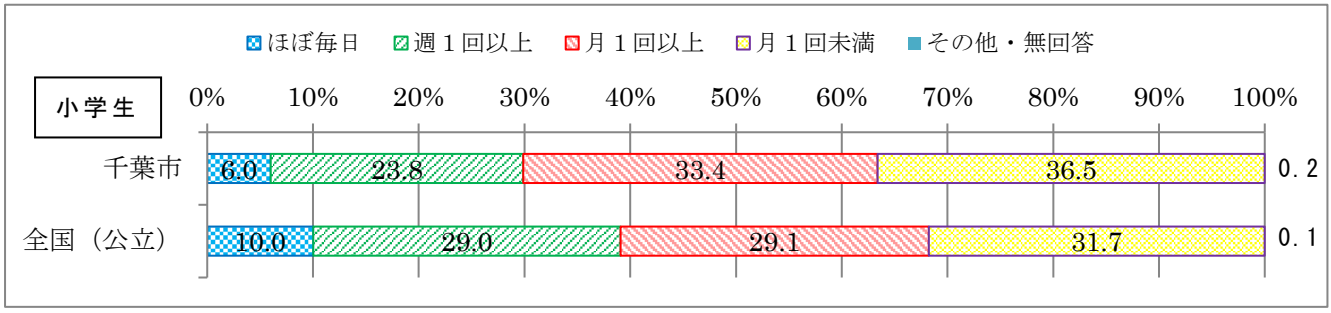


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→30.2%（全国より 9.9 ポイント低い）

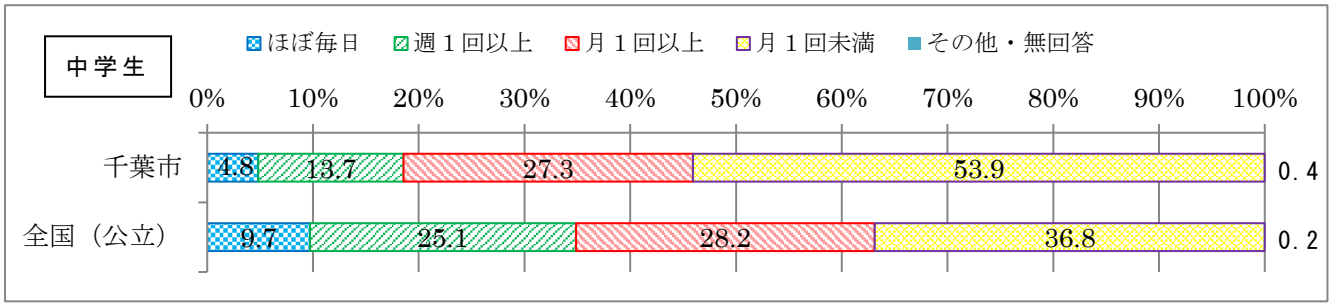


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→23.4%（全国より 10.0 ポイント低い）

5　あなたは学校で、コンピュータなどの ICT 機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために、どの程度使用していますか。（小 27）（中 27）
※令和元年度に同質問は無いため、（　）の記載なし

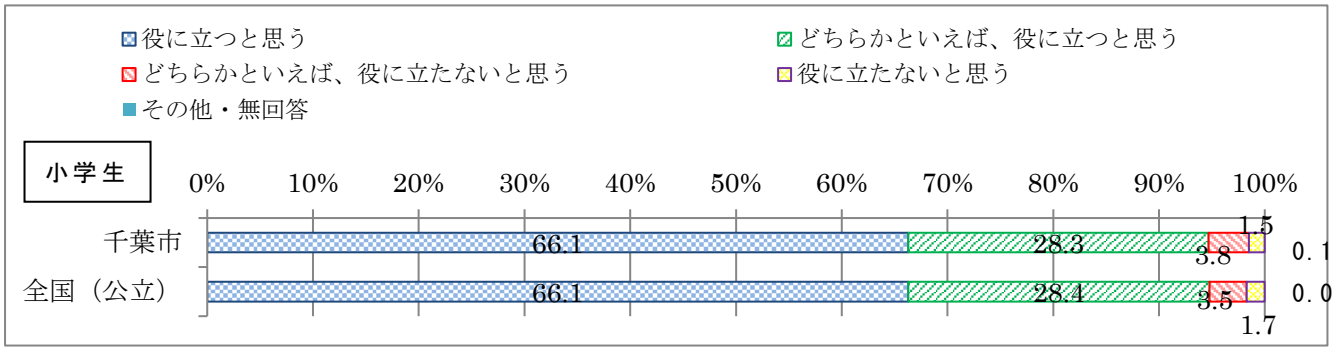


・ほぼ毎日、週１回以上→29.8%（全国より 9.2 ポイント低い）

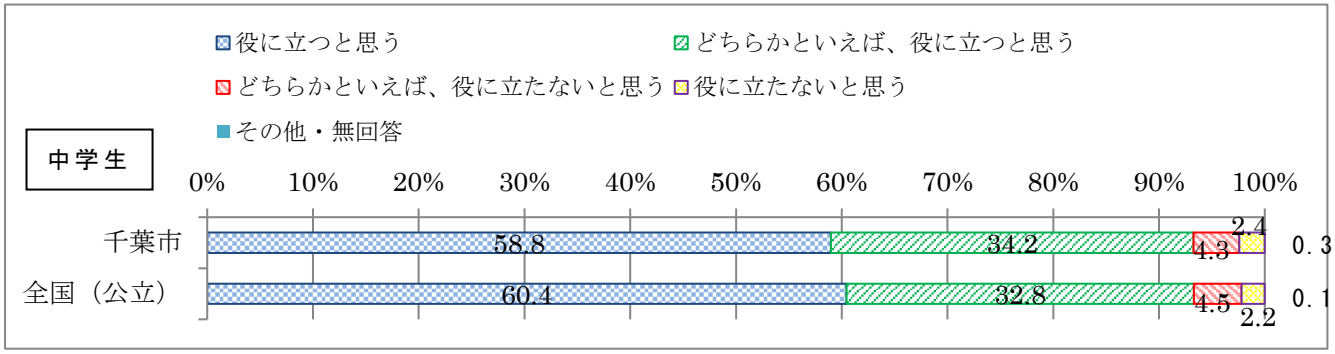


・ほぼ毎日、週１回以上→18.5%（全国より 16.3 ポイント低い）

6　学習の中でコンピュータなどの ICT 機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか。
（小 28）（中 28）
※令和元年度に同質問は無いため、（　）の記載なし



・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→94.4%（全国より 0.1 ポイント低い）

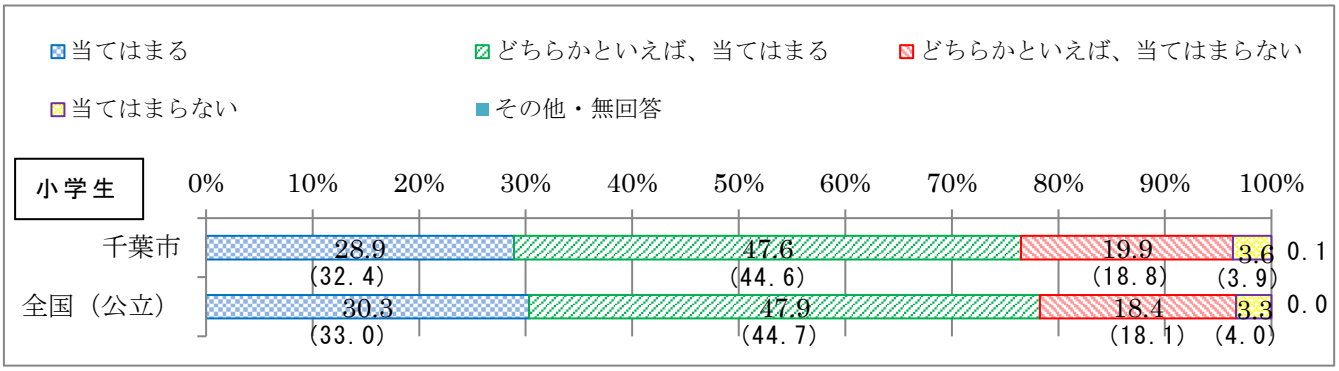


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→93.0%（全国より 0.2 ポイント低い）

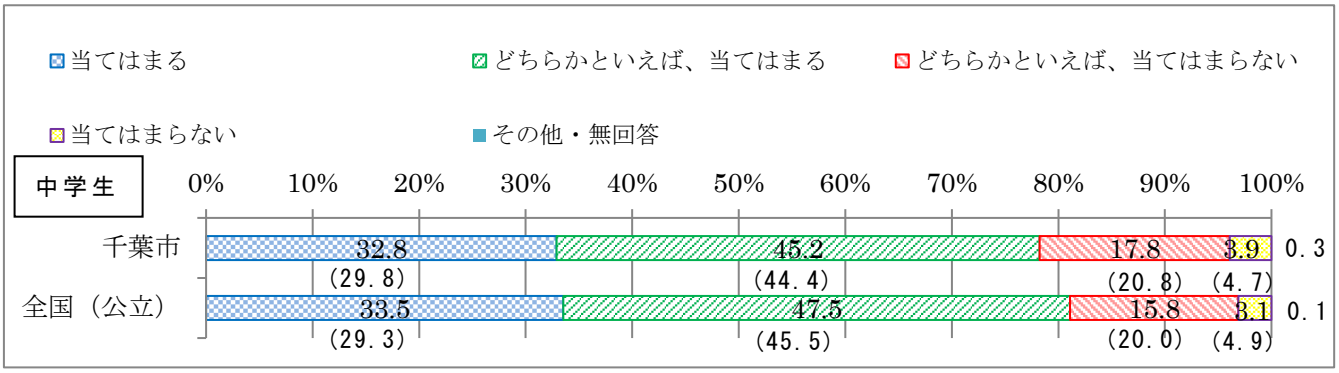
設問４「ICT 機器をどの程度使用してきたか」の質問については、小中学生ともに全国平均より 10%程度低く、昨年度までは ICT 機器の活用が十分にできていなかったことがうかがえる。また、設問５「他の友達と意見交換をしたり調べたりすること」についても、週に１回以上使用する割合が全国平均に比べて小学生で 9.2%、中学生で 16.3%低いが、今年度より１人１台タブレット PC が整備されたことでこの状況は改善していくことが見込まれる。設問６「ICT 機器を使うのは勉強の役に立つと思うか」という質問については、小中学生ともに 90%以上が肯定的に答えており、その必要感を期待しているので、日々の学習においてより一層活用していくことが望まれる。

〔主体的・対話的で深い学びに関する意識〕

7　５年生まで（１・２年生のとき）に受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。（小 33）（中 33）

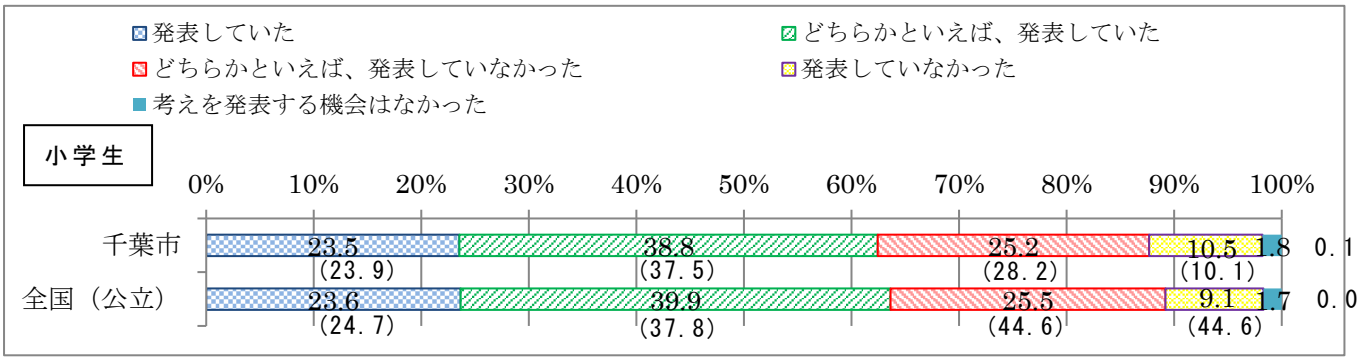


・当てはまる、どちらかというと当てはまる→76.5%（全国より 1.7 ポイント低い）

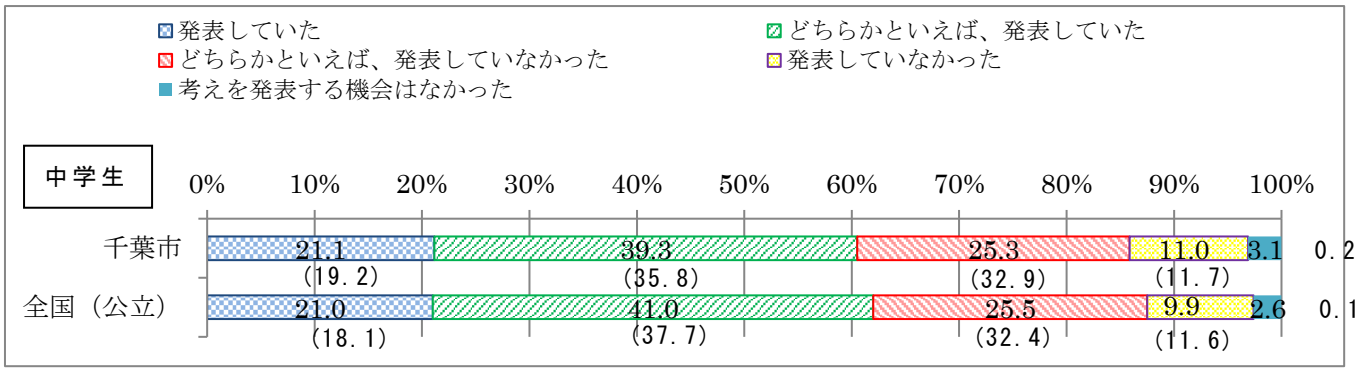


・当てはまる、どちらかというと当てはまる→78.0%（全国より 3.0 ポイント低い）

8　５年生まで（１・２年生のとき）に受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思いますか。（小 32）（中 32）

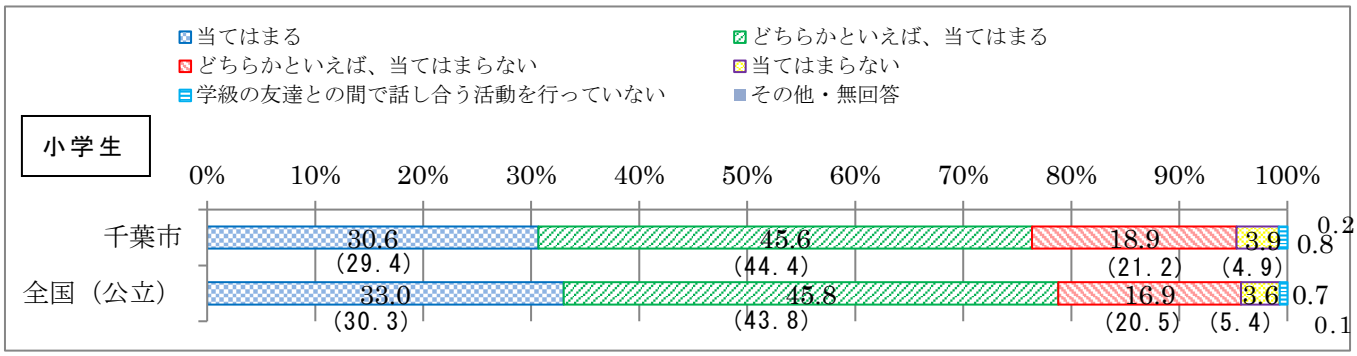


・当てはまる、どちらかというと当てはまる→62.3%（全国より 1.2 ポイント低い）

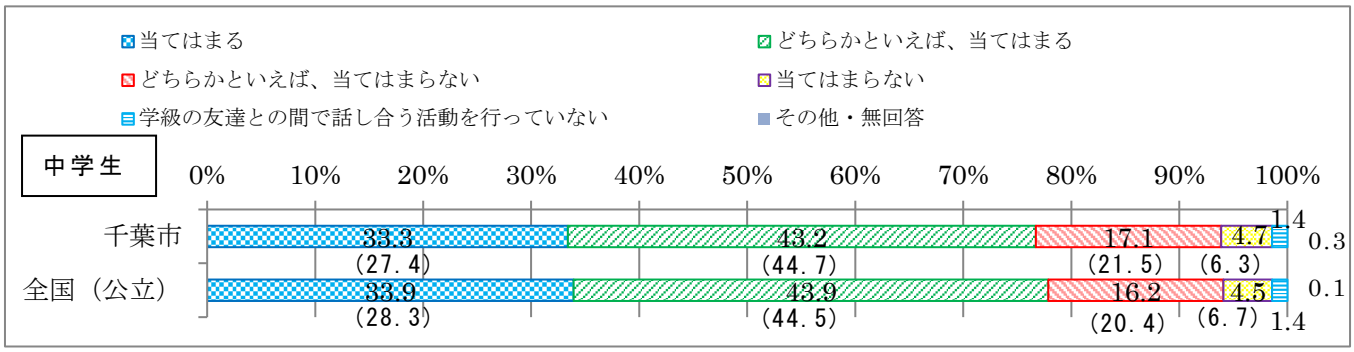


・当てはまる、どちらかというと当てはまる→60.4%（全国より 1.6 ポイント低い）

9　学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。（小 37）　学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。（中 37）



・そう思う、どちらかといえばそう思う→76.2%（全国より 2.6 ポイント低い）



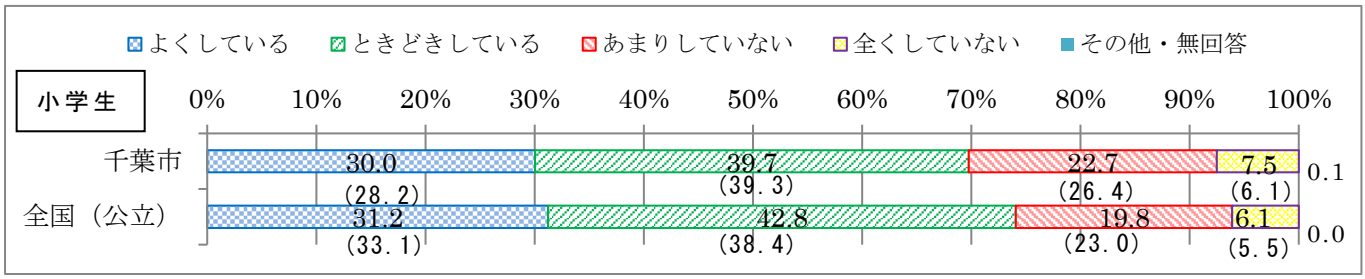
・そう思う、どちらかといえばそう思う→76.5%（全国より 1.3 ポイント低い）

設問７と設問８を比較すると、「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組む」ことを小中学生の 75%以上が肯定的に回答しているのに対して、「自分の考えを発表する機会に、工夫して発表する」ことを肯定的に回答している割合は 60%弱にとどまっており、自分の考えを発表するような機会を意図的に増やして経験を積んでいくことが必要である。

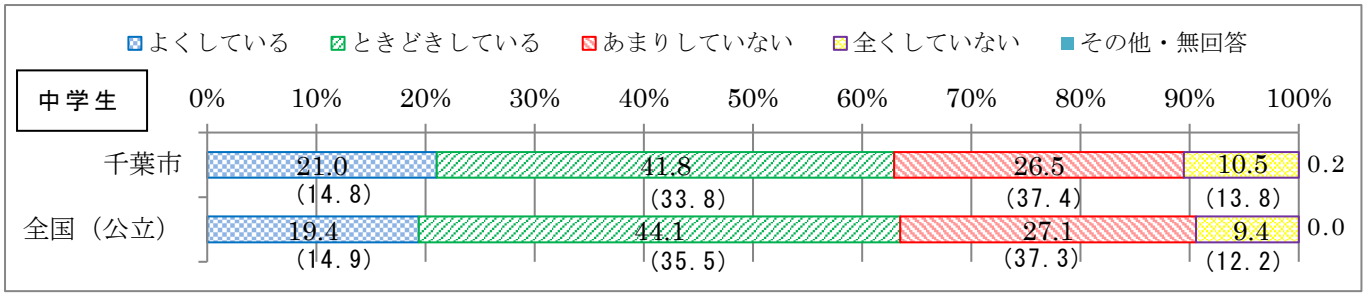
設問９「話し合う活動を通して自分の考えを深めたり広げたりすること」について、肯定的に回答する割合が、小学生は昨年度の 73%から今年度は 76%へ、中学生は 72%から 76%へと向上している。これは、各教科の学習の中で対話的な学びを意識して、意図的に取り入れたことの表れと言える。今後も、少人数での話し合う活動を意図的に学習の中に組み込んでいくなど、話し合う活動を積極的に取り入れていくことが望まれる。

〔家庭での学習に関する意識〕

10　家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか。（小 17）（中 17）

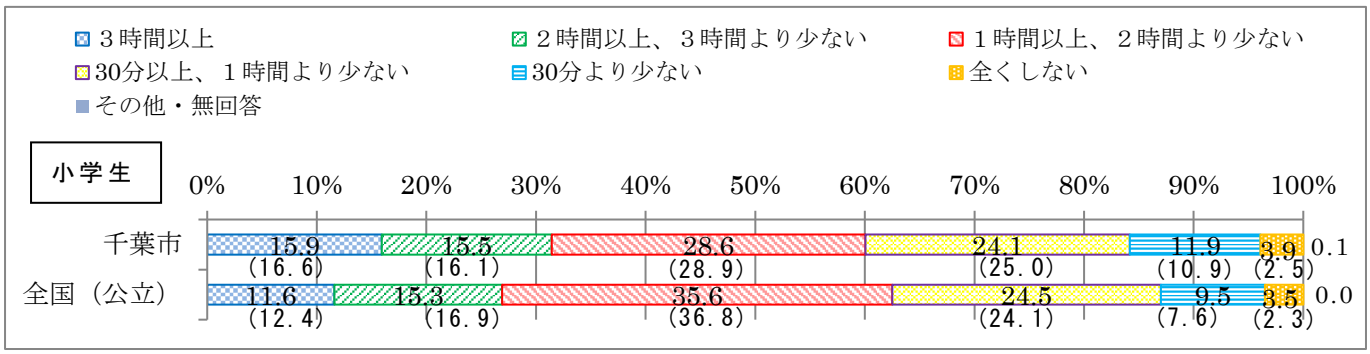


・よくしている、ときどきしている→69.7%（全国より 4.3 ポイント低い）

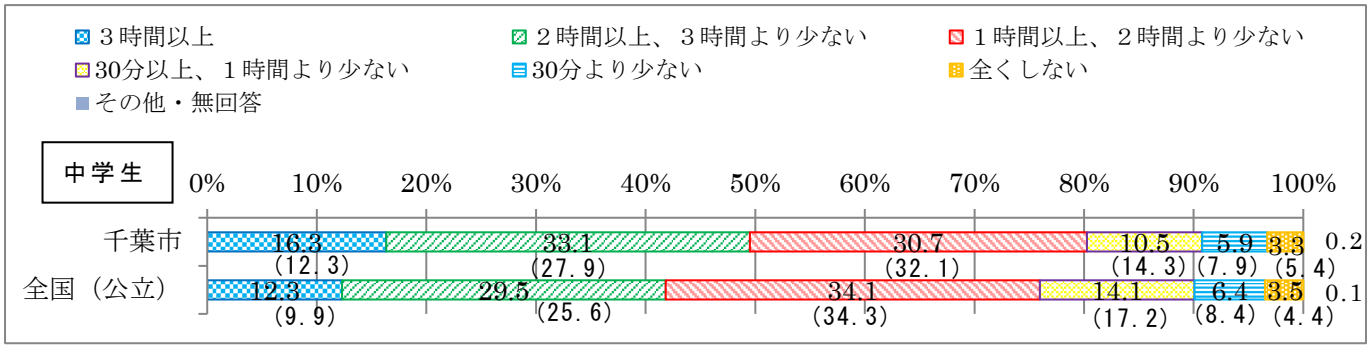


・よくしている、ときどきしている→62.8%（全国より 0.7 ポイント低い）

11　学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）（小 18）（中 18）

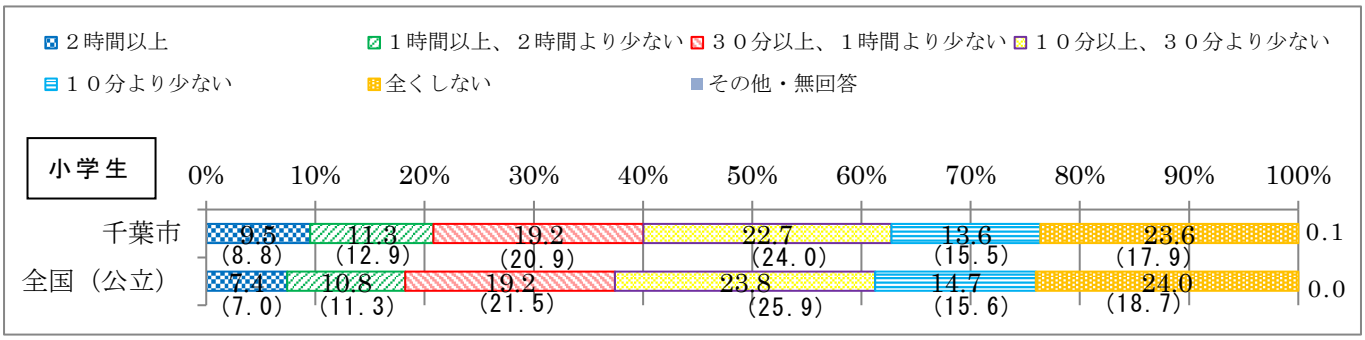


・１日２時間以上勉強をしている→31.4%（全国より 4.5 ポイント高い）
　全くしない→3.9%（全国より 0.4 ポイント高い）

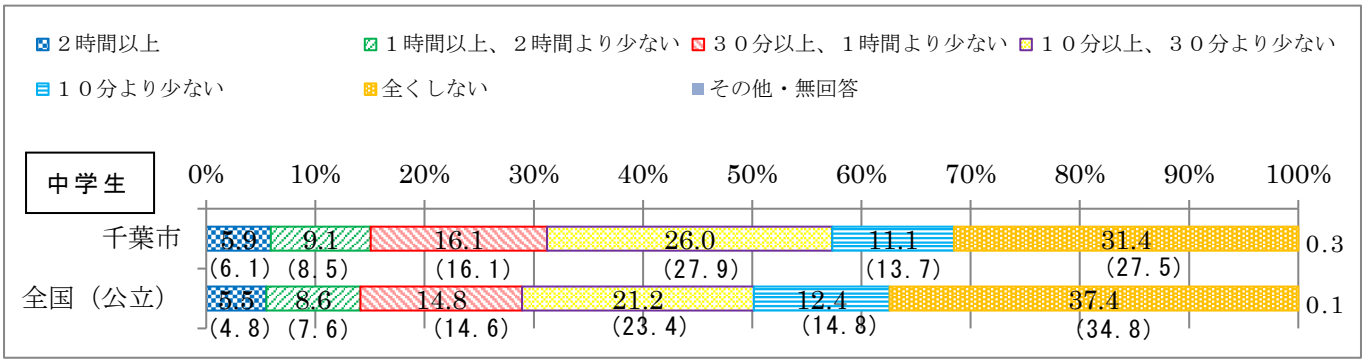


・１日２時間以上勉強をしている→49.4%（全国より 7.6 ポイント高い）
　全くしない→3.3%（全国より 0.2 ポイント低い）

12　学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、読書をしますか（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）（小 21）（中 21）



・１日１時間以上読書をしている→20.8%（全国より 2.6 ポイント高い）
　全くしない→23.6%（全国より 0.4 ポイント低い）



・１日１時間以上読書をしている→15.0%（全国より 0.9 ポイント高い）
　全くしない→31.4%（全国より 6.0 ポイント低い）

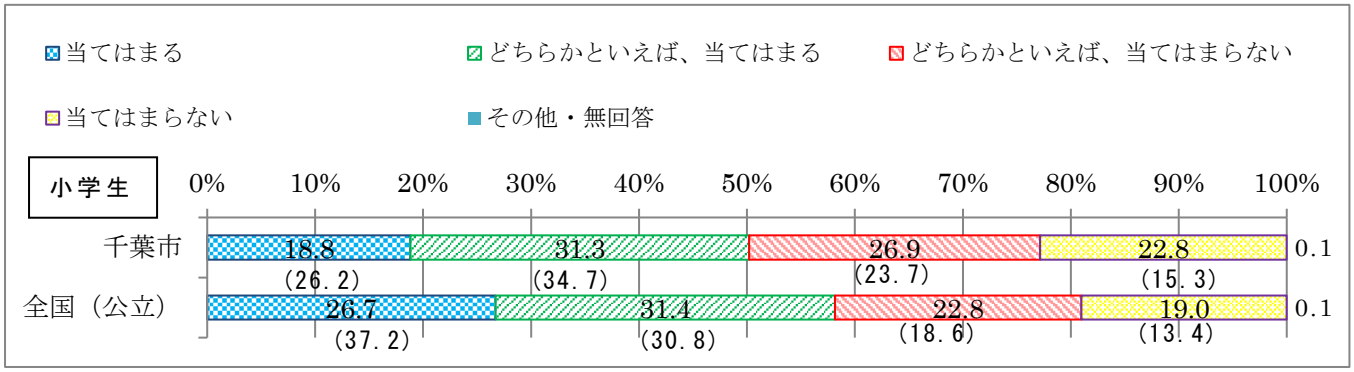
設問 10「家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか」への肯定的な回答率は、小中学生ともに全国よりも低くなっているものの、昨年度と比較すると、小学生は 67.5%から 69.7%へ、中学生は 48.6%から 62.8%へと向上しており、特に中学生の伸びが 14.2%と大きくなっている。

設問 11 より、普段１日２時間以上学習している児童生徒の割合は、小・中学生ともに全国平均よりも高く、学習習慣がきちんと身についている児童・生徒がいることが分かる一方で、「30 分より少ない」や「全くしない」という児童・生徒も１割弱おり、家庭での学習が習慣化していくような対策が必要であると言える。

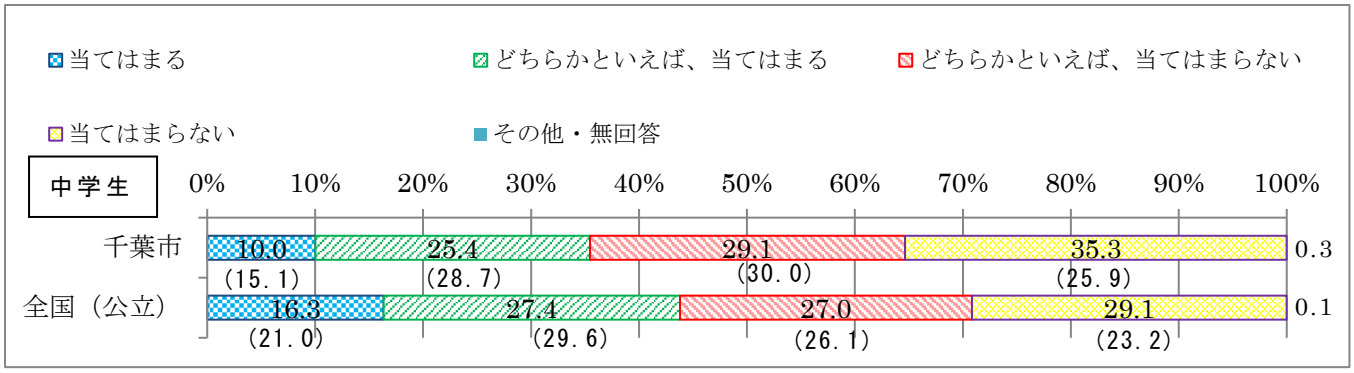
設問 12 より、１時間以上読書をしている割合は小学生で 20.8%、中学生で 15.0%と全国よりも高くなっている一方で、「全くしない」と回答した割合が昨年度と比較して小学生は 17.9%から 23.6%へ、中学生は 27.5%から 31.4%へと増えており、読書を進んで行う児童・生徒とそうでない児童・生徒の二極化が進んでいることがわかる。家庭で過ごす時間の中で、スマートフォンの使用など、読書以外に興味をもつものはいろいろとあるが、継続して読書に取り組むことを一層推進していき、読解力の向上を図っていけるようにしたい。

〔地域・社会との関わりに関する意識や外国に対する関心〕

13　今住んでいる地域の行事に参加していますか。（小 24）（中 24）

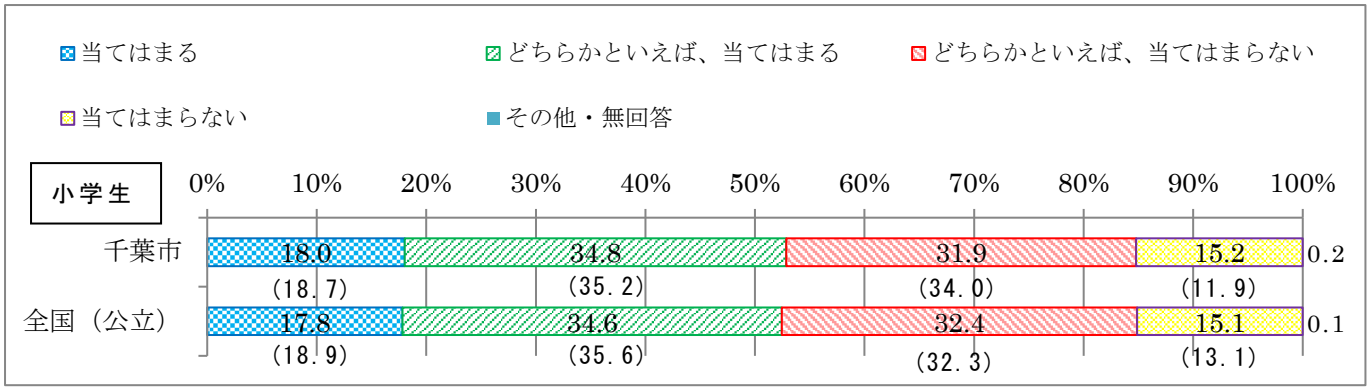


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→50.1%（全国より 8.0 ポイント低い）

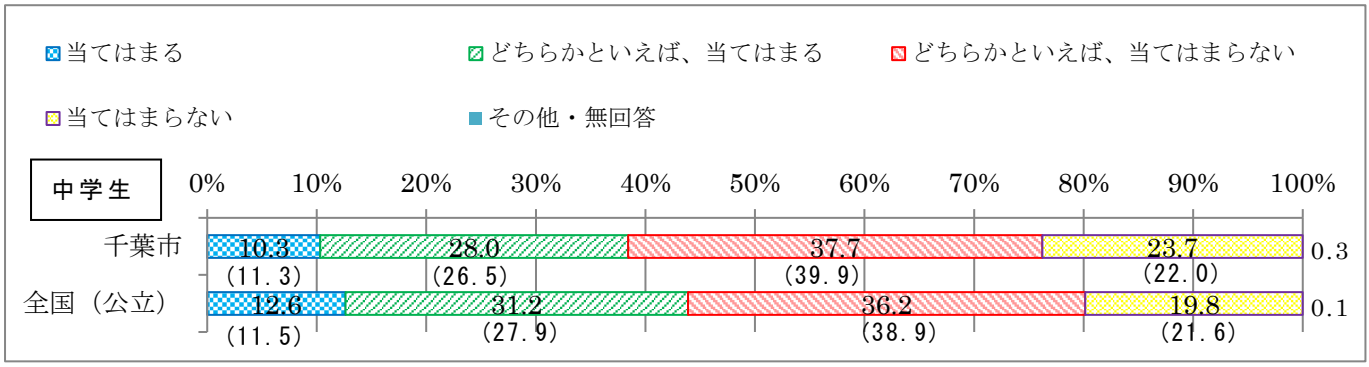


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→35.4%（全国より 8.3 ポイント低い）

14　地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか。（小 25）（中 25）



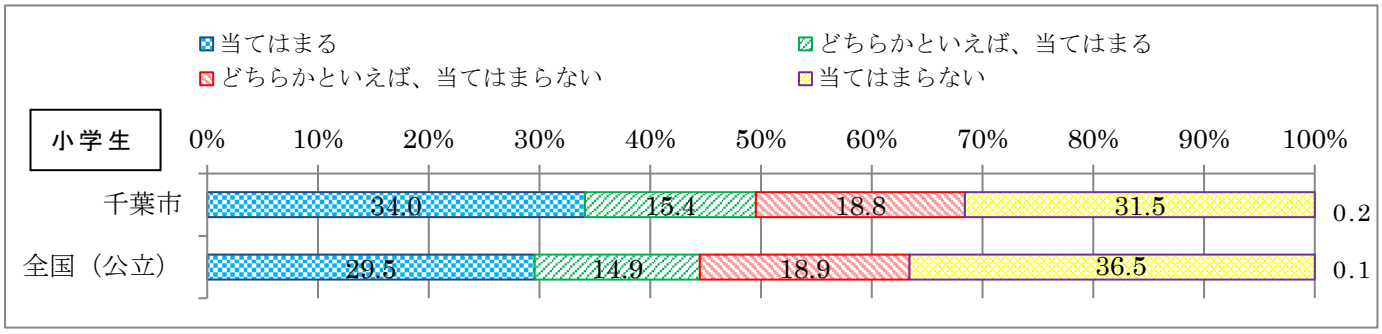
・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→52.8 %（全国より 0.4 ポイント低い）



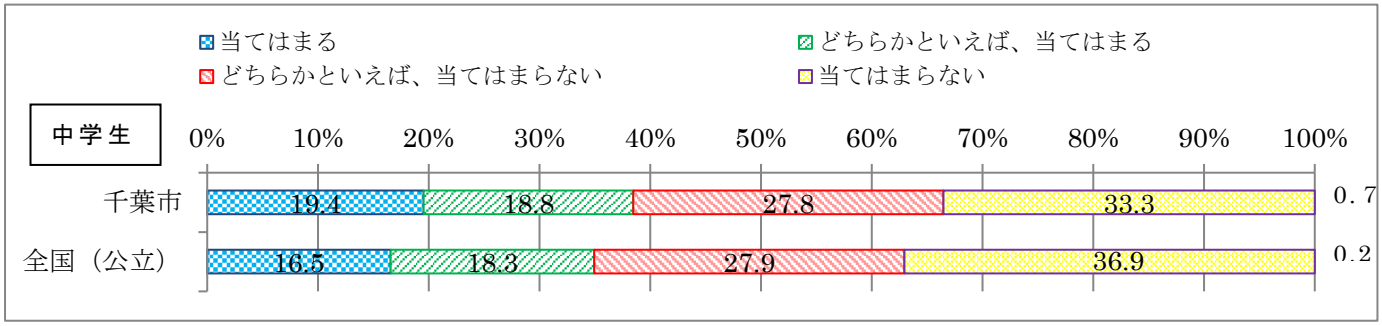
・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→38.3%（全国より 5.5 ポイント低い）

15　これまで、学校の授業以外で、英語を使う機会がありましたか。（地域の人や外国にいる人と英語で話す、英語で手紙や電子メールを書く、英語のテレビやホームページを見る、英会話教室に通うなど）（小 63）（中 63）

※令和元年度に同質問は無いため、（　）の記載なし



・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→49.4%（全国より 5.0 ポイント高い）



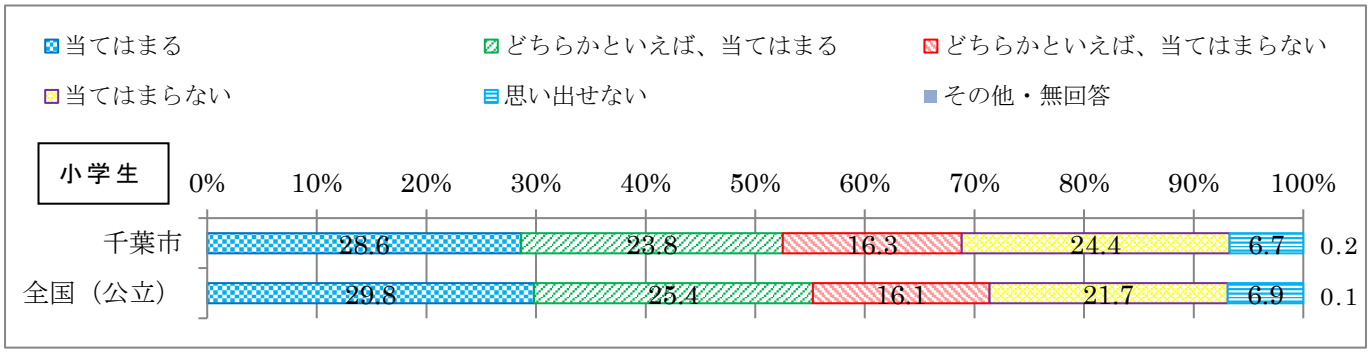
・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→38.2%（全国より 3.4 ポイント高い）

設問 13「今住んでいる地域の行事に参加していますか」についての肯定的な回答率は、小学生で 50.1%、中学生で 35. 4%、設問 14「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」についての肯定的な回答率は小学生で 52.8%、中学生で 38.3%といずれも全国平均と比べても低くなっている。地域と連携した教育活動のより一層の充実を図っていくとともに、地域の課題に目を向ける学習など、発達段階に応じた地域への関心の持ち方を考え、工夫した取組を行っていくことが望まれる。

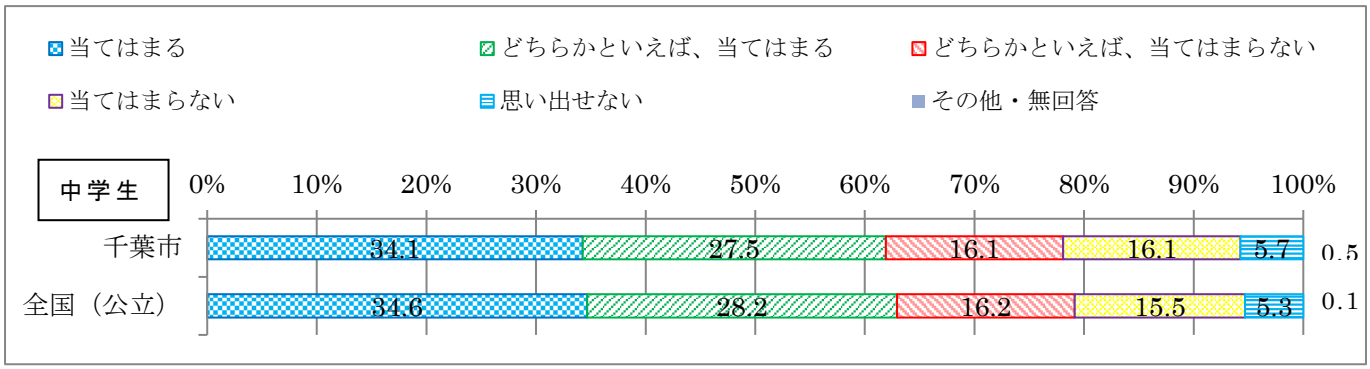
設問 15「これまで、学校の授業以外で、英語を使う機会がありましたか」については、肯定的な回答が小学生で 49.4%、中学生で 38.2%となっていて、全国平均をそれぞれ 5.0%、3.4%上回っている。英語を使う機会が学校の授業の中に留まらず、自分自身の生活の中にあるということは、英語の学習意欲にもつながっていく。実際の生活場面で活用する想定を学習に取り入れるなどして、実際に使うことを意識した学習を一層進めていくようにしたい。

〔休校中の学習および生活に関する意識〕

16　新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、勉強について不安を感じましたか。（小 64）（中 64）
※令和元年度に同質問は無いため、（　）の記載なし

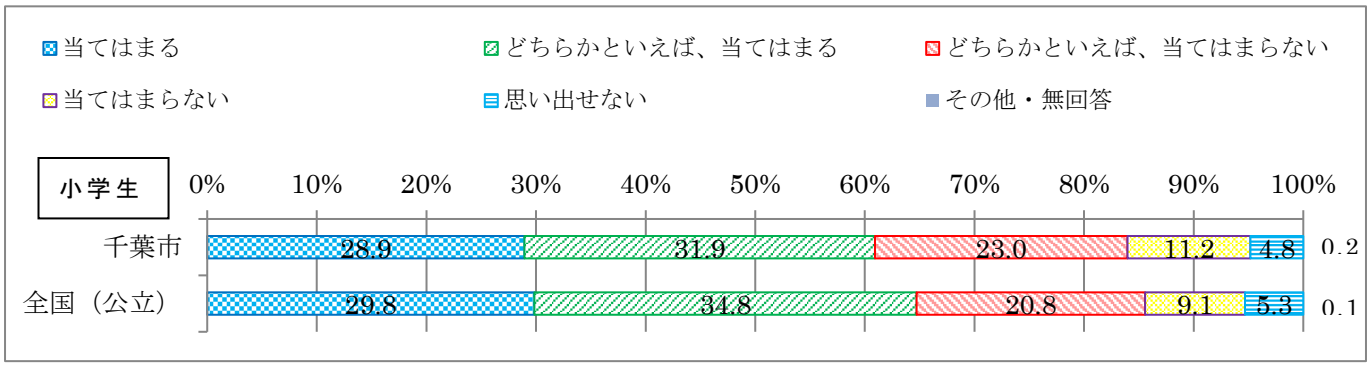


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→52.4%（全国より 2.8 ポイント低い）

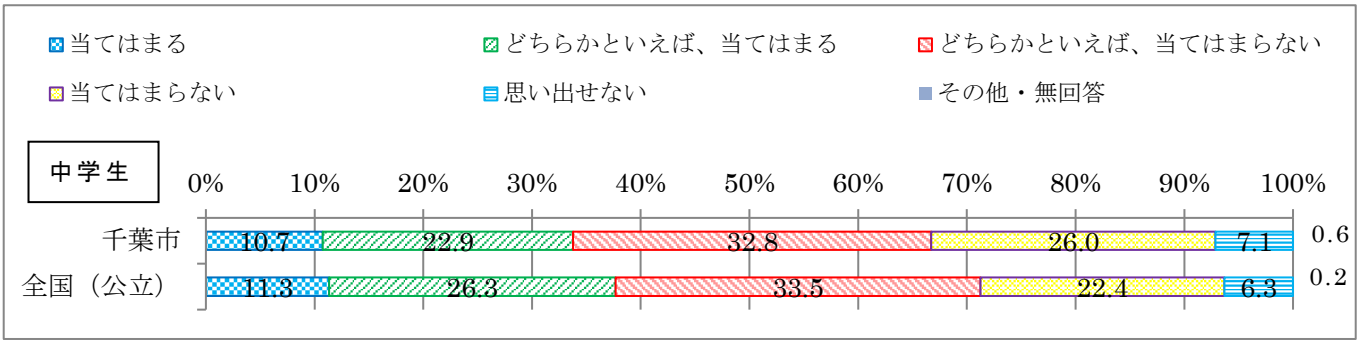


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→61.6%（全国より 1.2 ポイント低い）

17　新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、計画的に学習を続けることができましたか。（小 65）（中 65）
※令和元年度に同質問は無いため、（　）の記載なし

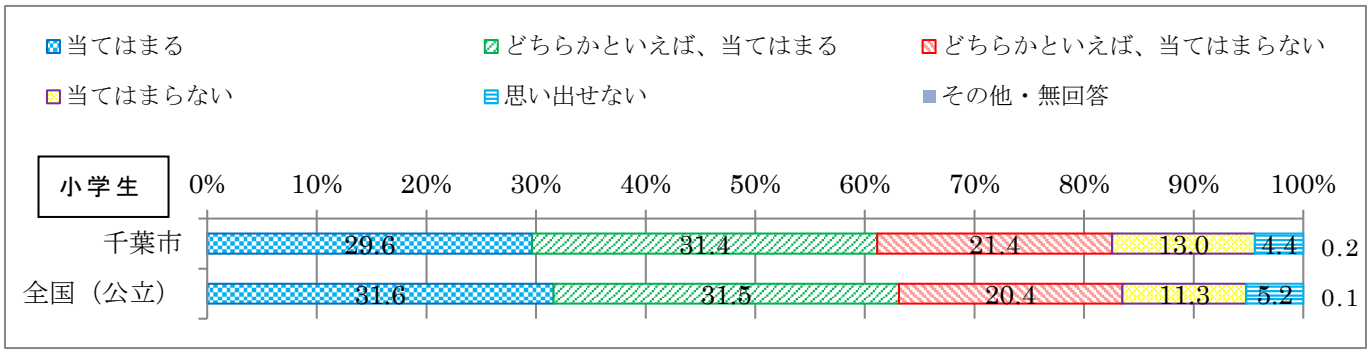


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→60.8%（全国より 3.8 ポイント低い）

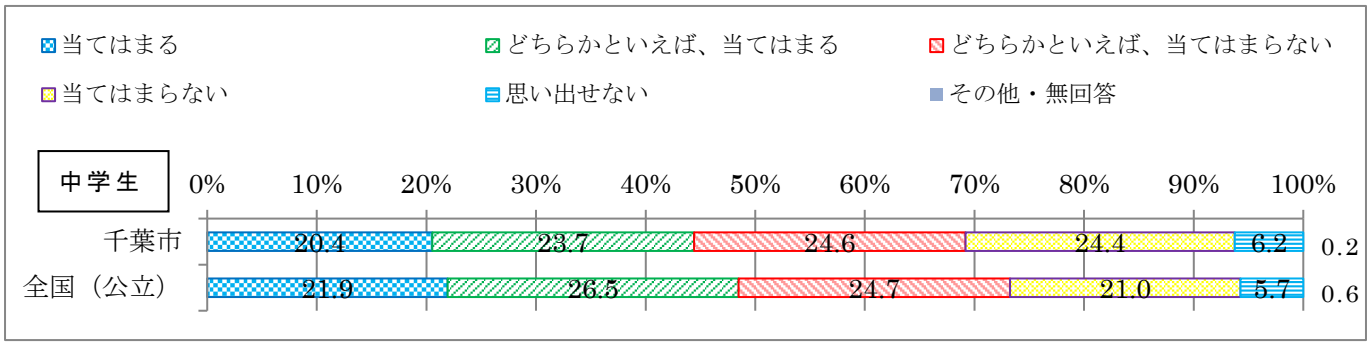


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→33.6%（全国より 4.0 ポイント低い）

18　新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、規則正しい生活を送っていましたか。（小 66）（中 66）
※令和元年度に同質問は無いため、（　）の記載なし



・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→61.0%（全国より 2.1 ポイント低い）



・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→44.1%（全国より 4.3 ポイント低い）

設問 16「新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、勉強について不安を感じたか」について、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した小学生は 52.4%、中学生は 61.6%となっていて、中学生の方が受験を意識して学習面での不安を感じたことが予想される。設問 17「休校期間中、計画的に学習を続けることができたか」については、設問 10「家で、自分で計画を立てて勉強をしているか」と比べて、肯定的に回答した割合が低くなっている。日頃は計画的に学習を進められていても、休校など長期的な休みとなると、計画的に学習を進められなかったことが伺える。設問 18「休校期間中、規則正しい生活を送っていましたか」については、肯定的回答が小学生の 61.0%に対して中学生は 44.1%と低くなっていて、中学生の方が休校期間中の生活リズムを整えることに苦労したことが伺える。これらの調査結果から見ても、休校となることで心理的な不安や生活リズムが崩れることによる身体的影響など、多くの影響が考えられるので、今後休校や学年・学級閉鎖等により学校に登校できないことが生じた際には、オンライン授業の実施などを含め、より一層のきめ細やかなサポート体制を作っておく必要がある。

４　今後の取組

（１）児童生徒の確かな学力の定着を図るため、授業改善を推進する。そのために以下のような取組を行う。

○市内全小・中学校において、全国及び千葉市学力状況調査の結果等をもとに自校の学力の傾向や課題を把握し、その改善に向けた学力向上アクションプランの見直しを行う。アクションプランは全職員で共有し、検証と改善を重ねながら実践に取り組み、各学校で重点テーマを設定するなどして、次年度以降の学力の向上に生かす。

○各教科の改善策や指導のポイントを示した「全国学力・学習状況調査の結果概要と指導改善に向けたポイント」「授業改善のすすめ」を作成し、各学校に配付して、校内研究での活用を図る。

○資質・能力の三つの柱に基づいた学習評価を的確に行い、指導改善に繋げられるよう学習評価に関する資料を作成、提示し、各学校で活用できるようにする。

○教科指導における、１人１台タブレット PC を中心とした ICT の効果的な活用の促進を図るために、教職員の研修の充実等を図る。

（２）「教育だよりちば」や Web サイト等を通して、家庭学習の大切さや家庭での児童生徒の望ましい生活習慣の在り方、スマートフォン等の正しい活用方法等、また、長期休業や万一の休校期間に備えての家庭内の役割分担やルール確認等について、広く保護者に発信する。

（３）教育委員会関係各課と連携し、自己肯定感を育む要素として、コロナ禍においても「どのように工夫したら児童生徒の諸活動（学習活動、学校行事、部活動等）が安全かつ効果的に実施できるか」という視点に立って学校に助言していく。

（４）児童生徒が、これまで以上に各教科や領域において、地域の様子を調べたり、地域の方々と関わったりする学習を進めるよう学校に助言する。